

◆2021年6月第2週の説教

■日時：2021年6月13日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」

■聖書：新約ローマの信徒への手紙5：1-5（p279）

■讃美歌：7「ほめたたえよ、力強き主を」・536「み恵みを受けた今は」

お早うございます。

東京では、コロナの感染拡大は収まりつつあるものの、大阪に比べて下げ止まりの状態が続いています。大阪はこのところ100人台ですが、東京は400人台です。

一方、ワクチン接種が始まり、すでに2回を終えられた方もいらっしゃいます。

しかし、2回目は、1回目より強い副反応が出ると聞いていましたが、その通りで、私がお二人の方から聞いた話しですが、お二人とも熱や吐き気など辛い日々を過ごされました。

勿論、その後、回復されています。

私は、来週の午後、近くの体育館で2回目の接種を予定していますが、その週は、極力予定を入れないでおくようにしようと思っています。

その一方で、心痛むニュースが続いています。

高校卒業生の大学進学率ですが、国内の全国平均では73%である一方、生活保護世帯で見ると35.3%、半分にも満たないのです。コロナ禍によって親や自分がアルバイトなどの仕事を失い、収入の道が途絶え、経済的に困窮した結果、大学への進学を諦めなければならない実態が数字の上でも浮き彫りになりました。憲法で保障されている教育の機会均等の理念が、コロナによって打ち崩されました。

又、国外に目を転じれば、コロナとは直接関係はありませんが、「朝日新聞」記事によれば、ミャンマーでの国軍による迫害から逃れて来たイスラム教徒ロヒンギヤを、バングラデシュ政府が、ベンガル湾に浮かぶ水没の危機に面している無人島に移し始めていることです。難民キャンプが過密になったことを理由としてですが、国土の大半が低湿地である

バングラデシュは、雨期には大洪水が起き、去年は国土の3分の1が浸水しました。そして、台風などの自然災害が起きれば、いつ水没するかも分からないこの島に、70万に上る難民の内、10万人を移す計画が立てられ、すでに18,000人が移されました。島に移されて行くロヒンギャ難民にとって、死への道が準備されていると言っても言い過ぎではありません。

これらの現実がすぐ隣りで起きている。

そのことを心に覚えながら、祈りつつ、今日と言う日を生きて行きたいと思います。

それでは、本日与えられた御言葉を見てまいりましょう。

ローマの信徒への手紙、第5章1節から5節です。

まず1節。

1：このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、

わずか1節ですが、この言葉から多くのことを考えさせられ、又問われます。

鍵となる言葉は“義”であり“平和”です。

冒頭にある「わたしたちは信仰によって義とされた」と言うのは、主イエス・キリストを神の御子、救い主と信じる信仰によって、私たちは神様によってすでに義とされていると言うのです。これから義とされるものではありません。すでに義とされている、神様の前に義しい者とされていると言うのです。

義しいと言うのは、神様との関係を意味する言葉です。

イエス様を知らずに生きていた時、私たちは罪を犯しても、その罪が贖われていることを知りませんでした。罪を犯しつつ、さらに罪に罪を重ねる以外にありませんでした。その罪とは、すでにパウロが1章29節以下で、21にもわたる罪の具体的な内容を記しています。

① あらゆる不義

- ② 悪
- ③ むさぼり
- ④ 悪意
- ⑤ ねたみ
- ⑥ 殺意
- ⑦ 不和
- ⑧ 欺き
- ⑨ 邪念
- ⑩ 陰口
- ⑪ そしり
- ⑫ 神を憎む
- ⑬ 人を侮る
- ⑭ 高慢
- ⑮ 大言
- ⑯ 悪事
- ⑰ 親にさからう
- ⑱ 無知
- ⑲ 不誠実
- ⑳ 無情

④無慈悲です。

これらの罪から自由である人はいません。

悪意を抱いたことのない人、妬みを覚えたことのない人はいないと思います。

人との関わりで不和を招いたことのない人、陰口を言ったことのない人はいないと思います。

高慢であり、時に大言を吐き、悪事をたくらみ、不誠実、無情、無慈悲でなかった人もいないと思います。

私たちは誰もが皆、心の内に罪の暗闇を持っています。

そして、誰もが皆、その暗闇を追い払いたいと切に思う気持を持っています。

暗闇を追い払えるのは、光です。

その確かな光、いかに深い暗闇であっても、それを追い払い、又いかなる力をもってしても、かき消されることのない真実（まこと）の光を求めて、私たちは人生の途上を歩いて来ました。

そして、知らされています、主イエス・キリストを。

このお方こそ、真実の光であることを。私たちの心を覆う、厚い厚い罪の暗闇を照らし、暗闇を追い払う真実の光であることをです。

そして、私たちは、主イエス・キリストを心に迎え入れました。

わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストによって、神様との間に平和を得ています。

神様との間に得ている平和。

もはや、神様に敵対する必要のない心の平安です。

そして今、自分の心を省みます。

この平和が、この平安が、私の心に訪れているかどうかをです。

2 節です。

2：このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。

「このキリストのお陰」とは何を指すのでしょうか。

パウロは、己を省みる私たちの現実を知り、私たちに呼びかけます。

キリストを仰ぎ見よと。

イエス様の十字架と復活を想い起こせと。

心の暗闇が息を吹き返し、再び私たちの心を覆う時、パウロはイエス様の十字架の前に立つことを呼びかけます。

十字架は誰のためであったのかと。

十字架の苦しみは、一体誰のためであったのかと。

それは、この私のためであり、あなたのためであり、私の、あなたの、心の闇を吹き払うためのものであったことを、今一度私たちに想い起こさせます。

そして、神様からの一方的な恵みによる信仰が与えられた今、私たちは「神の栄光に与る」ことが出来ると言うのです。

神の栄光に与るとは、何れの日にか、神様と会い見（まみ）える時の訪れです。

どのように会い見（まみ）えることが出来るのか、それは誰にも分かりません。

しかし、間違いなく、確実に、信仰によって、私たちは神様の栄光に与れる、神の国に入ることが出来ると言うのです。そして、そのような希望が与えられていることを誇りに思うと言うのです。

さらに、3 節から 4 節です。

3：そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、

4：忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。

3節は、普通に考えるのなら、理解しにくい言葉です。

苦難を誇りにするなど、考えられないからです。

苦難とは苦しみであり、自ら望んで苦難を受ける人など考えることは出来ません。

苦難に襲われた時、私たちは一瞬でも早く、苦難から逃れる道を探し、それを見つけ出したいと願うのが普通です。

しかし、パウロは違います。

苦難をも誇ると言うのです。

身に降りかかる人生の苦しみ、試練、苦痛、それらを避けたいと思うどころか誇ると言うのです。

一体、パウロは何を言っているのかとすら思います。

この時、このパウロの主張を解く鍵は、4節の最後にある言葉、希望です。

希望とは、人間にとって、今日を、そして明日を、生きる力の源です。

希望があれば、希望さえ失わなければ、私たちはどのような試練にも、患難にも、苦難にも耐えることが出来ます。

パウロがここで述べている苦難とは、キリストの救いを宣べ伝える時に襲われる苦難です。即ち、福音伝道に伴う迫害です。どのような苦難に襲われようとも、いかなる迫害に遭おうとも、それに耐え、堅く立って動かされず、主の業に励む時、練達、この言葉は、ある研究者によれば、神様からの保証と言う意味ですが、神様から保証される、神様の栄光に与ることが保証される。そのような希望が与えられているからこそ、苦難を誇ることが出来ると言うのです。

そして、5節です。

5：希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

「希望は、わたしたちを欺くことはありません。」

何と言う、確信に満ちたパウロの言葉かと思います。

この言葉を言わしめているのは、もはやパウロではなく、パウロの心の内を満たしている聖霊であり、そして、パウロ自身が経験している彼に降り注がれている神様の愛です。

神の愛について考えます。

神様の愛ではなく、導きであるなら、人生を振り返る時、その跡を幾つも辿ることが出来るように思います。

大学入試の時、神様は、ただ一つの大学だけを与えて下さいました。

教員採用が決まった時、その倍率を知って、妻は私に「宝くじ」に当たったと言いました。

定年で教員生活を終える時、牧師となるための按手礼を受ける時でした。

意図したわけではなく、気が付けばそのようになっていたのです。

このような人生の歩みを振り返る時、あの時もこの時も、そして今も又、神様の導きを覚えることが出来ます。

しかし、神様の愛について、私はまだ十分に知り得る者となっていないと思います。

イエス様の十字架での苦しみがどれほどのものであったのか、又、死への恐れがどれほど深いものであったのか、そして、その痛み、その恐れを乗り越え、ゲッセマネの園で「杯を取り除けて欲しい。しかし、あなたの御心のままに」と祈り得たその信仰が、どれほど強く揺るぎないものであったのか、私は、自分に与えられた人生を通して知らされて

来るのだと思います。それは同時に、私自身の罪の深さと神様の憐れみ、そして恵みの深さを知る旅路でもあると思います。

最後ですが、今病床で闘っておられる姉妹の長女の方から昨日送っていただいたメールをご紹介しますと思います。姉妹がどれほど教会を愛していたかを私たちは知っています。その愛を、これからは私たちが出来る範囲で、姉妹に代わって負うことが出来ればと思います。

「リモートで母に会い、母にとって、今が一番大切な時のような気がしました。今は、直接の励ましが一番のように思い、（私は）7月に休職をし、私の住む所に1ヵ月連れて来ようと思います。父もいます。私が24時間看護を致します。在宅診療も頼みました。

1ヵ月頑張って励まし、その後、介護医療院に入所する事にしました。コロナ禍の中、直接転院したら、母には暫く会えませんから。

倒れる前日も、私は母に会いに立川に行き、握手をして、またね!! と別れ、それきりで。母も教会が生き甲斐で、いろいろ話してくれていました。まだまだやりたいことがあったと思います。

家族限定との事で、皆様には会っていただくことは難しいですが、礼拝の様子は聞かせたいと思います。出来れば目を覚まし、以前の元気な母ではありませんが、まだまだこれからの人生、信仰と共に過ごしてもらいたいと思っています。

8月に入り、落ち着いたなら、教会にもお伺いさせていただきたいと思います。その時には、母の元気になった様子をお伝え出来ますように、全力で支えて参ります。

有り難うございます。

以上です。

祈りましょう。